

加藤登紀子



ロシアとゆかりの深い方々に、新たな日ロ関係の可能性についてお話をうかがう「JSNインタビュー」シリーズ。
3回目となる今回は、ハルビンに生まれて物心つく前からロシア人に囲まれ、ロシアとはひとかたならぬ縁をお持ちの加藤登紀子さんです。お父様の「武勇伝」を交えつつ、日ロ関係史と複雑に絡み合う加藤家とロシアの歴史を語っていただきました。

1992年8月、
ウラジオストクでの「コンサート



ゴーリキー劇場のステージ

「これはコンサート
のフィナーレ。ゴ
リキー劇場は素晴
しい劇場でしたよ。
ほんとは1991年
にやるはずだったん
ですよ。ちょうどゴ
ルバチヨフが軟禁さ
れたとき。私はフラ
ンスにいたんだけ
ど、もう騒然とし
て。仕切ってたのが
父だったからすぐ電
話して、やめよう
って言ったたら、「お前
はせっかちなやつや
なあ、3日待てへんか」って。3日ってなによって結局や
めにしちゃったんだけど、そしたらほんとに3日後にゴル
バチヨフが解放されたの！「お前はロシアってもんを知ら
んな」って言われましたけどね（笑）。

その前から父はウラジオヤハバロフスクに何度も通って
ただけど、あそこはソ連じゃなくてロシアだって言い続
けてましたね。私は革命ってところからソ連を見てるか
ら、「お父ちゃんおかしいよ」って言ってたんだけど、
「お前はなんも知らんな。あいつらなんも変わらへ
ん、ロシア人のまんまや」って。

ソ連からロシアへの転換のときも父は向こうにいました
けど、驚いたことにね、ロシアになった途端にみんなの家
の奥から二コライの肖像画が出てきたって。父は「想像通
りだった」って。「彼らは全然ソ連人じゃない、ロシア人

有名人のお父ちゃん

なんだ。ソ連って虚構なんだよ」って言ってましたね。
その父がコンサートの直前に急死したんです。

父が全部仕切ってましたから、連絡先もわからないし、
大変でしたね。うちのママに「ロシア語思い出して頂
戴」ってせつついて、父はこんなことになりましたけど行
きますからってなんとか伝えてもらって。ウラジオまでの
直行便がない頃だから、まずハバロフスクまで行くんだけ
ど、これがまた大変で。飛行機は遅れるし、着いたら空港
は真っ暗だし、翌朝のウラジオ行き飛行機は来ないし。



ハバロフスク駅にて見送りの人々と

でもほんとにみんな
大歓迎してくれて。父
が家族のように親しく
してた人たちがいっぱい
いるんです。みんな
熱いんですよ。父の写
真をコップに立てかけ
て。オンオン泣いたり
はしないんだけど、
「お父さんのことが好
きだった、すごく世話
になった」ってね。

うちの父はもう生涯
ロシアに捧げちゃって
ましたからね。好きで
好きでたまらなくて。京都の「キエフ」っていうレストラ
ンに、ロシアからミュージシャンやコックさんを呼ぶため
に、ウラジオが開放されるとすぐに向こうへ通い始めたん
ですよ。京都にはロシア人用のアパートがあったんですけ

ど、そのロシア人たちが万引きしたりするんですよ(苦笑)。しょっちゅうお世話になるから、お父ちゃんは警察でも有名で、父が行くと、「お迎えに来はったで〜」って。もうどこでも有名名人でしたね。ロシア人にまつわるあれこれが好きだったんですね。

父が最初にウラジオに行ったときの写真があるんですけど、バーツで女優に囲まれて。みんなが、「パパ、パパ」って、そういう人だったのね。

そう言えば、ウラジオのコンサートの前にロシア側とギャラの話があって、こっちは何もあてにはしていないんだけど、そういう話は一応しなきゃいけないでしょ？ その時はハイパーインフレで、毎日物価があがっていくわけですよ。ルーブルでもらってもしようがないってことで、間に入ってた父が、「船いっばいのカニって話も出てんねんけど、どうや？」って言うから、私の事務所のマネージャーが真つ青になって「え…カニですか…」って(笑)。

でも、そっちにしたいほうがよかったですよ。カニはちゃんとお金に換えてくれる人がいたんですから。結局、もらったルーブルを円に換算すると1万円くらいだったかな。何十万ルーブルか分からないけど、ゴリキー劇場にしたら、今までこんなに出したことないっていうくらい払ってくれたのね。

レストラン「スナガリー」の开店

私の意識の中では、うちの父が“突然”ロシアレストランを始めちゃったんです。1957年、私が中学2年。その頃、ロシア人がみんなハルビンから追

い出されて、舞鶴とかに引き上げてきて、彼らを路頭に迷わすわけにはいかなくてレストランを始めたということなんですけど、とにかく、ある日、あったのね、レストランが。学校から帰ってきたら玄関が開まって、母がいなくて、それが新橋に开店した日です。

リユーバって奥さんと気の利かない旦那さんと、この2人にやらせるつもりだったんですね。自分はただ一杯飲んでただけ。でもやっぱり難しかったのね、経営っていう面。結局母が毎日出るようになって。それがうちのスナガリーの始まり。私の記憶では、お店が終わると毎日のようにロシア人たちが歌ったりね。彼らひとりひとりの話は何日かかっても喋り尽くせないですよ。

コックのクセニアって女性の人生がまたすごいんですよ。ロシア革命の年に生まれて、お父さんがコサック兵だったから生まれると同時に抱っこされてハルビンの方まで逃げたわけですね。当時、日本軍はそういうコサックたちを組織して、対ソ対策のためにコサック村を作ってたんです。そこで大きくなった彼女は、村に出入りしてた日本人と結婚するのね。子どもが何人かいたんだけど、ソ連のハルビン侵攻の日に長男だけが離ればなれになっちゃって。顔がロシア人だからいじめられて引き揚げ列車に乗せてもらえなくて。でも彼はコサック的な教育を受けていたから、サバイバルしながら線路の横を歩いて歩いて、ようやくはるか彼方の日本で家族と再会するの。

彼はその後、ロシアの格闘技サンボのトップになるんですよ(※書籍『たった独りの引き揚げ隊』に詳細)。私が中学くらいのときに、この彼が結婚式を挙げただけで、それがほんつとに素晴らしかったの。式はニコライ堂で、その隣の建物の2階でパーティーをやったんだけど、みんなもう踊って歌ってね、あれが私は歌手としての自分の原点だと思っの。

『百万本のバラ』とチエルノブイリ



1987年日比谷野音にてアキラ・ブガチョフと

うちの父の企画で1986年にキエフでコンサートをやるはずだったんですよ。ところが、父が下見に行ってきた日に、チエルノブイリの事故が起きたんです。父は、「こんなときだからこそお前は行くべきだ」ってすごく言っていましたけど、受け入れる方もそれどころじゃなくて結局中止になっちゃったんです。そんなこともあって、その年に歌い始めて『百万本のバラ』を、翌年に正式にリリースすることにして、夏にブガチョフ(※1)を日本に呼んだんです。

事故の後、国が放射能のいろんな情報を隠してた時期があったでしょ。ブガチョフも事故のわりとすぐ後にあそこでコンサートをやったみたいなんです。ウッドストックみたいな、支援のための。その後、彼女が肝臓を悪くしてってっていう話だったから、私たちがすごく心配したわ。

しかし、とにかく彼女は呑んべエで、うちの父が珍しく、ウォッカを5杯までしか許さなかったんです。宴会で

は飲んだ数かわかるようにテーブルにグラスを並べてただけで彼女は、バツ！て隣の人のを飲んじゃうの。そういうかっこいい人でした（笑）。

ハルビン学院と父と夫と

意外なつながりで言うと、うちの父はハルビン学院（*2）の卒業生なんですけど、後藤新平に送り出された最後の学生なんですよ。送り出されてハルビンに着く前に後藤さんが亡くなって。そして、後藤新平の孫が鶴見俊輔さんで、私の夫の藤本敏夫は大学で、鶴見さんのゼミに入ってたんです。

そもそも後藤新平がハルビン学院を作ったのは、日露戦争の後、日本はあまりにもロシアに対する理解が足りない。これではまた戦争になってしまう、ということもあったわけですね。私は「どうせ侵略者の子供だから」って父をいじめましたけど、父たちの意識は、侵略と言えは侵略なんだけど武力で侵略してる意識はないから、交流する人でありたい、ということ。父が結婚して大陸に渡ったのが、1935年（昭和十年）ですから、日中戦争もまだで、その時点でもちろん戦争するつもりもないし平和だったの。ま、それは勝手な解釈かもしれないけど。

『知床旅情』と国後島

領土問題とか国境問題が問題視されて、一番困るのは漁師の人たちですかよね。うまくやってくればいいのになって思いますよ。

森繁久彌さんの『知床旅情』という歌ができたのは、森繁さんが『地の涯に生きるもの』という映画を作ったからなんです。羅臼の大きな海難事故の話なんですけど、森繁さん演じる漁師には3人息子がいて、長男は流水にさらわれて、次男は戦争で死んじゃって、三男はいろいろあったんだけど漁師になってくれて、自慢の息子だったのに、その海難事故で死んじゃうんです。

羅臼の漁師たちの間には、何とかって風が吹く時には羅臼に帰って来ちゃダメだ、国後へ逃げろっていう鉄則があるんです。その事故の時も、国後に逃げた人は、拿捕されてしまったけど生きて帰って来た。でも大部分の人たちは羅臼に帰ろうとして沈没してしまった。父親はもう口惜しがって口惜しがって。国後へ行けって言ったのに：って。それも領土問題ですよ。

いろいろ紐解いていくと、全部がつながってきますね。国境や民族の戦いによって何が起こって、人がのたうち回ってどう生きてきたか。引揚者もそう、ポートピープルですよ。国に所属できなかった人たちですからね。でも、たとえ相手が戦争してる国の“敵”であっても、1対1である限りは、目の前で転んだ手を差し伸べて「大丈夫？」って、人と人はそういう関係でいなくちゃダメだって。国の違いなんてない。全部、人と人だって。父も母もそういう考えの人だったし、それが私は一番大切な思想だと思いますよ。

(2013.7.12)

*1 アーラ・ブガチョフ：1949年生まれ。ソ連・ロシアの国民的歌手。日本では『百万本のバラ』の歌い手として知られる。

*2 ハルビン学院：1920年、元南満州鉄道総裁の後藤新平の肝いりでハルビンに設立されたロシア語の専門教育機関。創立当初は「日露協会学校」、後に「満州国立大学ハルビン学院」。

*本稿は「月刊ロシア通信」8月号に掲載したインタビューです。

加藤登紀子（かとう ときこ）

1965年東大在学中に第2回日本アマチュアシャンソンコンクールに優勝し歌手デビュー。「ひとり寝の子守唄」、「百万本のバラ」「知床旅情」などのヒット曲をだす。1968年の旧ソ連ツアーを皮切りに歌手活動は年間を通して国内外で行っている。3・11東日本大震災後には被災地を度々訪れ復興支援活動を行っている。女優として『居酒屋兆治』（1983年）などに出演。宮崎駿監督のアニメ映画『紅の豚』（1992年）では声優としての魅力も発揮した。「鴨川自然王国」理事。WWFジャパン評議員。2012年11月 New Album「登紀子 旅情歌 風歌 KAZEUTA」、2013年4月 New Single「過ぎし日のラブレター」をリリース。（ユニバーサルミュージック） 近著：『命を結ぶ』（中央法規出版）

<http://www.tokiko.com>

* 関連書籍紹介 *

たった独りの引き揚げ隊
10歳の少年、満州1000キロを征く

石村博子 著
角川書店
定価1680円
2009/12刊

後にサンボの生きる伝説、「ピクトル古賀」となるコサックの血をひく少年の物語。



ハルビンの詩がきこえる

加藤淑子 著
加藤登紀子 編
藤原書店
定価2520円
2006/8刊

加藤登紀子さんの母：淑子さんが語る美しき追憶の街、ハルビン。写真も多数収録。

